世界に広がる豊かな人的ネットワーク

本研究科が持つ多様性と豊かな人的ネットワークの広がりを世界地図上にてピックアップし、本研究科の在学生・修了生による世界各地の開発フィールドでの活躍や現地に寄せる思いをご紹介します。

尾田 直美 [修了生]

JICA セネガル事務所　ボランティア企画調査員

現在、セネガル国における協力隊事業班全般業務（協力隊員の受け入れ先における要望調査、新規案件開拓、協力隊員の活動支援等）に従事しています。
服飾業界で働いていましたが、チュニジアにおけるボランティア活動をきっかけに、海外ボランティア人材のコーディネーターとして国際協力に貢献する仕事へと大きくキャリアチェンジしたため、開発の基礎を学びたいという思いから入学を決意しました。
論文執筆の道のりは決して平坦ではなく、2019 年には当時勤務しており研究対象でもあったスーダンで政変が起こり退避帰国となり、予定していた現地調査ができなくなりました。また退避後は勤務国が変更になるなど、本務としても研究を続ける上でも非常に苦しい状況でした。現地に行けない分、文献研究に力を入れ、主な調査対象を変更したり、email を用いるなどの工夫を行い、また、指導教員の熱心で丁寧なご指導のおかげで論文を書き上げることができました。論文執筆において得た学びは研究成果だけでなく、あきらめずにコツコツ続けることや、目の前にある壁に圧倒されても必ず乗り越えられる、という気づきを得たことです。

池田 麻衣 [修了生・国際社会開発専攻 博士課程 3 年]

現在、ガーナにおける児童労働プロジェクトの事務業務に従事する傍ら、障害児と家族を支援する NPO でボランティア活動を行っています。
日本では理学療法士として子どもの成長・発達のお手伝いをしてきました。日本の福祉制度とニーズの乖離に疑問を抱き、青年海外協力隊に参加しました。そこでの経験や考えていたことを、改めて学術的に考え直したいという思いで入学を決意しました。修士課程では、「障害」に向き合うためには理学療法という専門性を超えて、幅広い視野と知識を深めることが重要であることを痛感しました。現在は、ボランティア時代に関わった NPO のもとで学んだことを基盤に実践的な活動をしています。具体的な支援の提案や実践を通して、関係者と共にガーナにおける「障害」を考えています。

渡部 晃三 [修了生]

ケニア国派遣 JICA 専門家

修士課程在学中、「先行研究から学ぶ」、「複数の視点で客観的に対象を見る」、「研究の問いを磨く」ことの重要性や論文作成の基礎を丁寧に指導いただきました。先生方や在学生とのテキスト科目やスクーリングでの意見交換から新しい視点が得られ、それは国際協力の現場で応用することができました。開発に関わる問題は外国だけでなく日本にもあり、日本の福祉の今後を考える大切さに気付かされたのは、日本福祉大学ならではのことです。
現在はケニアに滞在し、保健医療研究機関の人材育成の仕組み造りを支援する国際協力事業に従事しています。研修等の活動を行う前に、「果たして効果はあるのだろうか？」、「誰に対し、どのように役立つのだろうか？」と、一度立ち止まり、関連分野の先行研究論文を読んでから取組むようになったのは、本研究科での学びのおかげです。

北原 照美 [修了生]

ネパール交流市民の会
JICA 草の根技術協力事業プロジェクトマネージャー

本研究科では、モルディブのユニセフに所属し、乳幼児期発達支援プロジェクトに携わりながら学びました。同国ではそれ以前に青年海外協力隊員としても活動していましたが、院での学びを現場で活かすことで、目の前に現れる現象が大きく変わることが多々あり、非常に感動しました。また、つまづいたときには、教授陣や仲間にタイムリーに相談できたことも大変貴重な経験でした。
現在はネパールの母子保健プロジェクトに携わっていますが、特に力を入れているのは、日本の地域にいる子どもからシニア層まで、市民の皆さんも活躍できる「国際協力」ならぬ「民際協力」です。「海を越えたご近所づきあい」と呼び、一方通行の「援助」ではなく、日常の中で互いに相手を思いやり、支え合う「“民際” 社会開発」を進めていきたいと考えています。

藤﨑 文子 [修了生]

日本赤十字社バングラデシュ代表部首席代表

南アジアにおける社会開発支援経験を相対化したいと思い本研究科に入学しました。当初は自ら関わったプロジェクトを修士論文に取り上げるつもりでしたが、研究を進める中で大学院ならではのテーマを選びたいと考え、活動の現場で拠り所にしてきた開発支援の枠組みを先住民族の福祉という視点から批判的に検討しました。これまでの「常識」を疑い、調べ、自分の言葉で表現するという研究の醍醐味を経験できたと思います。
大学院 卒業後、在バングラデシュ日本大使館勤務を経て、現在は日本赤十字社のバングラデシュ代表部首席代表として避難民支援事業の実施や各国赤十字社との調整等を行っています。
本研究科は、掲示板上での講義やスクーリングなど、社会人が受講しやすいコース設計に加え、現場経験豊富な教授や多様な経歴を持つ研究生とのネットワークが大きな魅力です。現場の経験をもとに、理論的に考え新しい視野を得ることのできる貴重な機会だと思います。開発支援の現場で頑張っている人にお勧めします。

小薗 正典 [修了生]

Economic Research Institute for ASEAN and East Asia(ERIA),Policy Fellow

私が本研究科で学んでいた当時は、バンコクにある国連機関でフードバリューチェーン構築事業に携わっておりました。そこでは、頻繁にアセアン各国の事業現場を訪れ、農家や流通業者等からお話を伺いながら事業を進めていましたが、本研究科で学んだ質的調査手法などを実際のサイトで活用しつつ、同時にその経験を研究科での学びにフィードバックしておりました。また、本研究科には特定地域開発研究という、途上国での調査を自ら計画・実施し報告書を提出することにより単位が取得できるユニークな制度がありますが、私は仕事に関連するサイトでの調査を単位取得につなげるなど、途上国での仕事と本研究科での学びの連携・相乗効果の発揮という面での本研究科の強みを大いに活用させていただきました。現在は、ジャカルタにある国際機関に勤務し、持続可能な農業・食料システムの構築や食料安全保障をテーマに、アセアン各国の大学との共同研究やその結果を踏まえた政策文書作りなどに携わっております。本研究科で修得した研究方法の基本が役立っていると実感するとともに、振り返ると、このように研究生活に身を置くきっかけとなったのは本研究科での学びであったように思います。

駒走 拓三 [修了生]

JICA カンボジア事務所

皆さん、カンボジアといえば何をイメージしますか。アジアの歴史に興味のある方は、１９７５年から７９年まで続いた内戦を思い浮かべるのではないでしょうか。国際協力の場で働いていると「カンボジアを訪れたことで国際協力の道を志した」という話をよく聞きます。当地では、内戦終結から４５年経った今でもその影響が色濃く残っており、最たるものの一つが教育システムといわれています。カンボジアでは、高校卒業後、２年間の教員養成課程を受講するだけで教師になることができます。これは、復興期の圧倒的な教職員不足に対応するための苦肉の策だったのですが、教員の知識・授業実践力不足に起因する基礎教育の質の低下という問題を抱えることになりました。そこで、JICA をはじめとするパートナーが２年制から４年制の教員養成課程に移行できるよう支援を行なっていますが、成果が出るまでには、まだまだ時間がかかりそうです。一度壊れた仕組みをもとに戻すのは、多くの時間と労力が必要です。教育は国の基礎であり、人づくりの基本です。本研究科は、多様な人材が交わる場であり、通信制ということで時間的制約もほとんどないため、教育の場としては非常に優れた仕組みだと思います。少しでも興味があれば、ぜひ一歩踏み出して新しい世界をのぞいてみてください。